

墓碑銘

『新壘』
63-1号

銘
霜月の陽のかがやきに死後もなほ命のごとく光る墓碑

儀
瞳の近き位置に誘ふ旅ありていつも空を持たざる地球

る
せめ立てる念ひはあらね爪光らせ出立の朝たをやかに

り旅
伝言板に書き置くことの今はなく先ざき急ぐわがひと

りどころ
血縁といふも水臭く野ざらしの椅子のひとつがわが倚

夕焼けとの会話

『新壑』2号

おのづからゆるしゆく身の意志表示裏澆しの目づまり
に鍼当つ

没りつ陽をなほ歳そたびふり向かむ捨てきしものに喚
ばるる念ひ

夕焼けとならば持てさうな会話よそんな気もする冬
の沈鬱

刃もの屋に刃ものが光る当然を玻璃戸にみて何かが華
やぐ

自らの吐きし言葉に減びゆく秋七種のひとつか桔梗

冬の自在

『新壑』
63-3号

人間てふも所詮は物体いづくに置かるとても自在は
あらず

捨ててきし筈の言葉を拾ふかな冬田に積る雪の斑に

みづからの過去を問ふべく雪に佇いまの暫く日暮れと
どめて

くもりゆく冬のガラス窓拭き終へて透明なまでわが孤
独あかるし

還らざる少女期眩し熱湯にくぐらす冬菜のみどり緊
まりて

冬の樂章

『新壑』
63-4号

雪灯籠死者との記憶よび戻す蠟の火の傾くほどなる
謀反

冬空に凍てしままはためく白きシヤツその胸にある孤
独と住みて

耳鳴りに令はせてゐたる夜の樂章膝に組む手は謐かに
ほぐる

いまはにて希ふことあらば力得て來ぬるばかりの黒髪
欲しき

うちつけの寒九の雨に見失ふ去年咲く筈なりし草ほ
とどぎす

雪に雪
『新壑』5号
63-5号

くらぐらと雪降る氣配の身の構へ今朝は冷たき目薬
を差す

雪に雪重ねて積るすがしさを踏みゆくおそれ人への怖
れ

氷張る冬のうづうみかたくなに誰をも寄せずわが胸内
も

逆風に駈けゆく少年の老ふさやあくがれの声のどにつ
まらせ

老いてなほ生くるほかなき日々になり蓄めゆく種子
は発芽の頃ぞ

しやがの花

『新壘』
63-6号

春ながら孤を保ちがたきいち人に　り充ちるる桜花
の明るさ

雨後の著我いろ増しながら楚々と立つわが自意識は過
不足にあらむ

孤独とふひとつの城に君臨し今日よりは明日に咲かせ
たき花しやが

いつの日も神に幻ゆるされて俄仕立の詩口ずさぶ

結語にて決まる詩歌ひとつのため人らは苦悩の瞬きを
せる

春の園

『新壑』
63-7号

明るきゆゑのとまどひに燈を消しぬ深更とふ園に零さ
るる孤独

みづみづと紫陽花ま白き記憶なる雨の日の死者に逢は
ねばならぬ

鍋底の焦げ削ぎをれば誰の手か延びきて水道の蛇口
をひねる

一瞬の悲の発光かわがまなこ捉へて離さぬ流星ひとつ

幸・不幸の別なく窓は閉ざされゐるて園に方形のくつき
りと浮く

点る

『新墾』8
63-8号

激流にながす未練の煌めきにいつぱんの薔薇とわれのま
ち上る

晚餐の灯は窓よりこぼれ大手毬の百の白花のことごと
く点る

優劣を採る神在り係累は不仲のまま墓に隣り合ふ

明け暮れの言葉に傷つくしばしばを支へて明るきリビ
ングルーム

孤りとは無限の自在かなしみはものを言ひたき朝のひ
どり

南部風鈴

『新壑』
63-9号

おびただしき孤独なれば荷に積み入れて運ぶうつの
南部風鈴

家族とは未来の破壊者かたみに託つ愛と憎のかけひき、

病み瘦せて暗き冥土の死者のため初夏色のネクタイを
選る

見返りてはならぬひとつに過去がありなじまざる愛を
束ねし虚構

安穩の日々を支へて通るたび出窓の猫がひそかに笑ふ

風鈴

『新壑』
63-10号

たつき

鈴 天涯の孤独にあらねひとり身の生活にひびく南部風

り風喚ぶ
何ものにもまぎれゆかざる孤独のため吊るす風鈴しき

れよ
群集に孤独の不安まぎらはせあとさきとなる脚の縛

すばかり
昼顔の昼を張りつめ開くゆゑわれはわれの意志はげま

歩む
コスモスの爪先までも乱れ咲きほとほと疲れて晩夏を

ひらひらと舞ふ二枚舌のいちまいを抜くや抜かずや闇
魔蟋蟀

風鈴の鈴を抑へて窓ひらく窓に乱されたくない思ひ出
のため

通るたび風ひかる徑に揺れながら未だ幼き酸漿の色

窓越しのはるかなる空に昇りゆく月を囲みてわれのモ
ナリザ

老いの杖とも自ら押しゆく乳母車押し戻さるる晩夏
女坂

秋雨

『新壑』
63-12号

いくばくか持ちたる知恵の貧しくて埃まとふ身を夕
陽に托ふ

真夜を降る雨をうつつうつつ樂の音としづかに聴けば今の
さきはひ

はろばろと魂越えて風は吹く無形と言ふはあくがれの
ほか

紺の夕べはほづき色の灯を点すこのさきはひのち何あ
らむ

日照のたどたどしければわが背丈つひに越ええず秋の
向日葵